

日本イーライリリーがヤングケアラー支援の取り組みを開始 ～有志社員によるプロジェクト構想から活動開始まで～

日本の超高齢社会において在宅でのケアは重要なテーマの1つですが、その中で、本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを日常的に行っている子どもたち、いわゆる「ヤングケアラー」の存在が注目されています。日本イーライリリーは、2022年2月より有志社員によるプロジェクトを立ち上げ、ヤングケアラー支援を開始しました。本レターでは、支援に至った背景、社員による企画立案から実行の過程、1年目の成果をお伝えします。

■ 今、製薬会社の日本イーライリリーがヤングケアラーへの取り組みを進める理由とは？

ヤングケアラーの実情

厚生労働省委託調査をもとにした「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、2021年発行 https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf）によると、調査に参加した中学校の46.6%、全日制高校の49.8%にヤングケアラーが「いる」という結果になっています。

また、「家族の中にあなたがお世話をしている人はいますか」という質問に対し、「いる」と答えた中学2年生は5.7%にのぼりました。同省の計算では、**回答した中学2年生の17人に1人がヤングケアラー**だったということです。

同省のヤングケアラーに関する特設サイト（<https://www.mhlw.go.jp/young-carer/>）では、家族のケアがヤングケアラーの生活に与える影響として、自分の時間が取れない、勉強する時間が充分に取れない、ケアについて話せる人がいなくて孤独を感じるなどが示されています。

ヤングケアラー支援の現状と課題

近年、行政やヤングケアラー支援が始まっています。しかし、まだ十分な支援策は確立されておらず、支援窓口への当事者本人からの相談件数も少数に留まっているとも報道されています※1。社会との接点が比較的少ないと想定される子どもであるがゆえ自分自身の認識がしにくかったり、家庭内での活動として表面化しにくかったりし、公的支援だけではなかなか手の届かないところがあり、当事者を含めたヤングケアラーの認知度向上と早期発見、把握、さらなる支援策の推進が課題となっています※2。

※1 毎日新聞2022年2月1日付、Forbes JAPAN2022年8月5日付など

※2 ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチームとりまとめ報告概要（2021年5月17日、厚生労働省・文部科学省の副大臣を共同議長とするヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム）

民間企業だから・日本イーライリリーだから出来ること

日本イーライリリーは、「世界中の人々のより豊かな人生のため、革新的医薬品に思いやりをこめて」というOUR PURPOSE（使命）の実現に向け、患者さん、医療関係者、患者さんを支える人々、社員やコミュニティなど、私たちが関わる全ての人々や事業を通して取り組みを進めてきました。革新的医薬品の開発・提供という患者さんへの貢献、さらにはビジネスにとどまらない取り組みによって、私たちが関わりを持つコミュニティを“より”良くする「ソーシャルインパクト」を常に創出し、社会課題を解決・改善していく。その姿勢こそがOUR PURPOSEの実現に不可欠であり、コミュニティと私たちがともに成長していく礎になると信じています。

日本の未来を支え、患者さんなどケアを必要とする人をも支える子どもたちのより豊かな人生は、私たちが関わりを持つコミュニティの持続的な発展につながるものであり、OUR PURPOSEの実現に大きく関係するもの。また、日本イーライリリーが培ってきたヘルスケアに関する知見や民間企業ならではの組織力、そして原動力となる社員の「思いやり」は、「ヤングケアラーを取り巻く環境改善」という黎明期の課題に対する一助となり得るのではないかと考え、支援活動をスタートしました。



■ ヤングケアラー支援とその取り組みの方向性～社員の力で形作る～

STEP 1 メンバー募集～テーマの設定

- ・ ソーシャルインパクトの象徴となる取り組みをボトムアップで企画すべく、社内ワークショップのメンバーを募集。全国各地から営業職、開発や管理部門、西神工場など多様な部門から有志社員26名が参加しました。
- ・ 「超高齢化社会におけるコミュニティの健康課題」を注力領域とし、そこから生まれる様々な日本における社会課題を議論。
- ・ 一方で、「日本イーライリリーらしさ」、「提供できる価値」とは何かを皆でリストアップ。そうした議論を重ねながら、テーマ候補を選定しました。

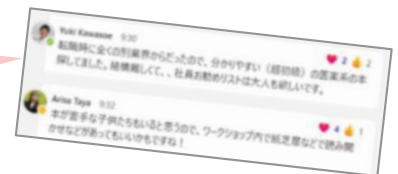


これらの要素から日本イーライリリーが取り組むべき社会課題の候補を選定：「ヤングケアラー」

STEP 2 目指す姿のすり合わせ～ヤングケアラー支援団体へのヒアリング～

- ・ 「ヤングケアラー」が候補として浮上したため、支援団体である「特定非営利活動法人ふうせんの会」をお呼びし、メンバーによるヒアリングを実施し、更に深掘りを行いました。
- ・ 「決して“かわいそう”な子どもたちではない」など元ヤングケアラーの声を聴くことで、**求められる取り組み**とはどのようなものが明確になったとともに、ヘルスケア等に関する情報へのアクセスや知識へのニーズも判明。具体的な活動案のイメージを持つことができました。

メンバーは社内チャットやランチオンミーティングでも活発に意見を共有



STEP 3 具体的な施策の決定

- ・ 支援団体の意見を踏まえ、この取り組みで日本イーライリリーはどのような姿を目指すべきか、どのような活動を具体的にを行うべきかをメンバーでじっくり議論。

「目指す姿」案	橋渡し役、伴走者、適切な理解、サポート体制強化、未来への希望⇒活動の指針に
活動案	レスパイトサービス、ヘルスケア等に関する情報、認知・啓発

- ・ ここからさらに、以下の議論を進めました。

① 主要テーマと出てきた活動案を、以下の軸で整理・マッピング

- ✓ 活動できる地域、頻度
- ✓ 関わることのできる社員の多さ
- ✓ 準備期間など必要なリソース量
- ✓ 日本イーライリリーらしさ

② 取り組む方向性を検討

- ✓ ①で出来上がったマップを念頭に、ステップを整理。社会への訴求という視点と独自性を加味しながら、日本イーライリリーとして取り組む方向性を様々な観点から絞り込みました。



■ テーマと3つの方向性を経営陣に提案し、全社でのヤングケアラー支援が決定

- ・ 社員による6か月にわたる議論の結果、日本イーライリリーは「ヤングケアラーを取り巻く環境改善」をテーマに、以下の3つの方向性をもって取り組みを進めることを経営陣に提案。
- ・ ソーシャルインパクトをもたらす全社的な取り組みの日本イーライリリーで初となるボトムアップによる提起を、経営陣は歓迎し、その方向性に基づく活動と社内推進への協力を賛同。

①ヘルスケア等に関する情報へのアクセス改善や知識向上

②支援団体等による提供サービスのサポート

③ヤングケアラーに対する社会の認知向上

■ 1年目・2022年、ヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けて

● 支援団体とのパートナーリング

② 支援団体
サポート

今後の活動が一方向的な支援にならないよう、また、よりヤングケアラーにコミットした活動にできるよう、元当事者も運営に関わり専門的知見を持つ「ふうせんの会」とパートナーリング契約を締結しました。今後様々な活動で協働し、活動へのアドバイスをいただく予定です。



- 取り組み開始にあたって、15年にわたって継続し、社員に広く浸透しているボランティア活動を推進・応援するプログラムである「リリージャパン・デイ・オブ・サービス (DOS : Lilly Japan Day of Service)」を活用することにしました。これにより、**今後の担い手となる社員の理解と参加**を促しやすくなるため、最初の取り組みとして全社員への巻き込みを狙いました。



リリージャパン・デイ・オブ・サービス 2022 (9月1日～9月30日)

神戸市に本社を置く会社として10年以上継続的に行ってきた被災地支援等、様々なステークホルダーや社会課題を対象に、全国各地で社員による自主的なコミュニティ貢献活動や寄付を継続しています。2022年は、ヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けた以下の特別プログラムを有志社員が中心となって企画運営。結果として1か月間で過去最多となる、のべ3,500人以上の社員が参加しました。

ヤングケアラーについて学ぶ

③ 認知向上

- 9月2日にキックオフイベントとして、「ふうせんの会」によるヤングケアラーの現状や課題、元ヤングケアラーによる体験談などオンラインセミナーを開催し、社員約500人が参加。
- その後、セミナーの録画視聴や講習会資料を用いて全国各地でチームや家族での勉強や議論が行われました。
- 10月12日にはクローズングイベントとして、元ヤングケアラーである「ふうせんの会」メンバーと社員とのパネルディスカッションを開催し、さらに理解を深めるとともに今後の取り組みの議論なども行いました。



チャリティウォークの実施

③ 認知向上

- 講習会後に、「ふうせんの会」メンバーと日本イーライリリー社長のシモーネ・トムセン、有志社員とで交流を兼ねたチャリティウォークを実施しました。
- チャリティウォークはDOS恒例の活動であり、その距離に応じて、地域貢献への寄付を行っています。
- 2022年は、ヤングケアラーへの理解を深め、また支援のための寄付につなげる活動として、全国で社員がヤングケアラーに思いを馳せながらチャリティウォークに励みました。



過去最長
総計
29,857kmを
達成！

■ 社員の声と今後の活動予定

議論の段階から初年度の活動まで、社員はこの取り組みに強く意義を感じ、熱心に取り組みました。上記のようなDOSの結果や、活動後の社内アンケートにも、その熱意が表れています。

ヤングケアラーに関する社内アンケート結果※3

- ◆ 社内における「ヤングケアラー」という言葉の認知度は活動前も82.0%と、一般人への調査によるヤングケアラー認知度52.1%※4よりも高かったが、DOS終了後では92.0%に上昇。
- ◆ 社員の中でも回答者の4.7%が「今思えば、自分自身がヤングケアラーであった」と回答。
- ◆ 回答者の92.8%が日本イーライリリーがヤングケアラー支援に取り組むことに意義を感じると回答。また、回答者の約8割以上が**2023年以降の継続したヤングケアラー支援の取り組みを期待**。

本社と現場が一丸となったプログラムで、企業としての社会貢献をより深く知ることができ、誇りを感じた。

気づいていなかっただけで友達にもヤングケアラーがいたかもしれない等、身近な問題として考えるきっかけになった。

来年以降もDOSでヤングケアラー支援の啓発を行うべき。DOS期間外での取り組みも期待したい。

普段の業務とは違う場で、違うメンバーとの活動は、気づきも多く、越境学習のような効果も感じられた。

自身に関係の無い問題、取り組めない問題、と考えている課題についてもその概念を取り払う事を学べた。

今後も継続して、ヤングケアラー当事者や支援団体の皆さんのお話を聞いて、学び続けたい。

※3 日本イーライリリー社内アンケート DOS事前調査 (2022年8月9日～31日、回答数362)、DOS事後調査 (2022年10月12日～21日、回答数363)

※4 ヤングケアラーの実態に関する調査研究 (株式会社日本総合研究所、2022年)

今後は、全国の支援団体はもちろん、自治体や他の民間との協働を念頭にアクションを予定。日本イーライリリーの持つ強みのひとつである、「全国社員のネットワーク」を活かし、ヤングケアラーへの“伴走”を継続したいと考えています。